

兄妹の風景

1

ピンクのシーツに包まれたベッドに横たわり、左手で玉を揉みながら右手で擦り上げると、敏感な先端は風船みたいに赤黒く膨れ上がり、針で少しでもつつけば、破裂しそうなくらいになってきた。

そろそろいきそうだ。僕は枕もとにあるティッシュペーパーを三枚引き出す。

ぐつと背中をそらして、Tシャツをまくりあげた胸元に、勢いよく満タンになっていたた精液を噴出した。一瞬の空白。時間が止まる感じに酔っていると、左手の部屋のドアに人の気配がした。

今日は家族はみんな帰りが遅いはずなのに……。

ぼんやりとした頭が思いをめぐらす前にドアが開いて、妹の沙友里が入ってきた。

唾然としてしまつて動けない僕を、沙友里はぼかんと口をあけて見下ろしている。中学三年になる兄貴が、自分のベッドで下半身裸になり何かをしていた。

その兄貴の裸の胸元には変な匂いのする白い液体が、とろんと垂れている。

悲鳴をあげて手当たり次第に物を投げつけられてもおかしくない状況なのに、沙友里のあけていた口が閉じた時、その両端はすつと上に持ち上がった。

「おいちゃん。あたしのベッドでオナニーするのがそんなに気持ち

いい？」

「恥ずかしげもなくするする言葉は出てくる。

僕は思わず右手をふつて否定のポーズをした。

これにはわけが、なんてどうしようもない事をついほざいてしまった。その右手には、白い布切れがまだまとわりついていてというのに……。

中央の白いあて布が黄ばんだその黄色い花柄の墊切れは、洗濯機の中から拝借してきた沙友里の下着だった。

沙友里の目がすぐにそれを捕らえる。

「あきれた。妹のパンツまで持ってきて……。それをどう使ったの？」

沙友里の言葉は有無を言わせぬ押しの強さで僕に迫ってくる。

とにかく僕は今発射したばかりのぬるい液体をティッシュでふき取るうとした。

「駄目よ。動かないで。あたしによく見せなさい」

妹に命令されるのは、実はそれほど珍しい事じゃない。

妹の方が勉強もよく出来たし、親の信頼も厚い。

腕力ではさすがに僕が勝つが、それ以外のことで妹に勝てる事は僕にはちよつと思ひ当たらなかつたからだ。

沙友里は僕の側にくると、僕の股間でしぼんでる物を、しゃがんでじっくり観察し始めた。

羞恥心に自分の顔が真っ赤になるのがわかる。数年前までは一緒に風呂に入る事もよくあったがその時と今では僕の体も、気持ちの持ちようもまったく変わっているのだ。手で隠そうとすると、容赦なく沙友里のピンタが僕の頬に打ち下ろされた。

ほつぺたに熱い痛みを感じて、僕はゆっくり手をどけた。

屈辱よりも恐怖が僕の気持ちを押しつぶし始める。

「ほとんど毛も生えそろってるのね。すっかり大人っぽくなって。びっくりだわ」

沙友里の指が僕の胸にやってきた。冷たくなった白濁液を指ですくう。

「ねとねとしてる。おもしろい。友達に聞いた話、本当だったんだなあ」

砂場で遊ぶ子供のような無邪気な表情で沙友里は液体を僕の胸に塗りたくった。

「何の……話だよ」

冷たくなってきたから僕は早くふき取って服をきたかった。でも沙友里は夢中で遊んでいる。

「ユカに聞いた話だけだね、男の精液はとろとろしてて、指にくっついていたら簡単に取れないくらいべとべととしてるって話。やっぱりそうなんだ。ぬるぬるしてる」

「いいかげん寒くなってきたんだけど、拭いてもいいかな」

「いいけど、あたしのパンツをどういう風に使ってたか実演して見せればね」

沙友里の目が、きつくなった。前髪がたれて、その間から睨む目つきに、僕は震え上がりそうになる。

嫌だなんて言ったら、このことを母さんに言いつけると言い出すのに決まってる。

僕は抵抗するのをあっさり諦める事にした。

黄色い布切れを顔に近づけて匂いを嗅ぐ。そして、萎えてしまった棒を左手でゆっくり擦り始めた。ぬるぬるした棒は刺激しても快感を呼び起こしてはくれない。

今終わったばかりなのだからあたりまえだ。刺すような痛みだけを

感じる。

「あたしのパンツの匂いどう？」

沙友里にそう聞かれることは、自分の行為のみつともなさを自分自身にはつきり知らせる。でも、そう聞かれる事で、何かしら変な興奮がやってきていた。

「いい匂いだよ。すごく」

正直に僕は言った。尿の匂いに混じって少しすっぱいチーズのような匂い。

その匂いを嗅ぐと、今まで萎えていたものが少しだけ元気になり始めた。

「手を離して、頭の上にはげなさい」

沙友里は僕の手からパンツを取り上げる。僕は言われたとおりにした。

「ほら、口をあけて」

「何をやる気だ？」

少しだけ開いた僕の口に沙友里のパンツが押し込められてきた。

避けるまもなく強い力で一気に口の中に沙友里の布切れが丸め込まれて入ってくる。そして沙友里の手はその次に、半立ちになった僕の股間の棒を握り締めた。

僕の口の中で唾液を吸った沙友里のパンツがじくじくになって、奇妙な匂いと味が湧き上がる。

「ユカもよく兄貴のチンコ擦ってやってるんだって。いくとときにビクンって感じで痙攣するのが面白って言ってた。皇月の所なんて兄貴と弟がいるから二人を相手にするのは毎日だとさすがに疲れるなんて言ってたな」

他人の手で握られるのは初めてだ。

僕のはさつき放出した事なんてすっかり忘れたみたいに、硬直し、先端が膨れ上がった。沙友里の話なんてどうでも良い。股間の快

感だけに僕は集中していった。

快感が押し寄せる。時折直接亀頭に触れられる痛みも、ちょっと辛
いスパイスみたいにい味付けに思えた。

粘液をかき回すような音が六畳の部屋の中で微かに聞こえていた。

僕たちのみだらな行為を、壁の棚に並んだ熊やねずみのぬいぐるみ
がじつくりと見物していた。冷たい人形の目に見守られながら嫌でも
興奮は高まっていく。

午後の日差しがピンクのカーテン越しに、汗と精液にまみれた僕の
体をほんのりと温めている。

「そろそろいきそうだね。あたしにもたくさん出すところを見せて
ね」

沙友里の腕の動きが速くなり、僕は我慢出来ずに二回目の射精を果
たした。

2回目だというのに驚くほどたくさんのミルクが勢いよく飛び散つ
た。

「うわー感動的。本当にビクンビクンって動くんだね」

沙友里は僕の股間に顔を近づけた。

そして少し匂いを嗅ぐと、僕の棒に唇をつけてきた。

「うふふ。キスしてあげる。今度からオナニーしたくなったらあたし
に言いなさいね。今日からお兄ちゃんのオナニーはあたしが管理して
あげる。自分でしたら、罰だからね」

沙友里は立ち上がると、笑いながら僕の胸元にティッシュの箱を投
げて寄越した。

三日間我慢したが、そろそろ限界に思えてきた。

自分するのはたやすいが、沙友里の罰が気になる。それに、妹に

擦られていく快感も忘れたいものがあった。

夕食を済ませて、しばらくは宿題をして時間をつぶす。

両親が寝静まるまでの数時間が何十時間にも感じて、待ち遠しかつ
た。

十一時過ぎに階下に降りてみると、父がトイレから出てくる場所
だった。

「弘明、勉強は適当で言いから早く寝なさい。頭の悪い男にとっては
健康だけがとりえなんだからな」

父はそう言つとあくびを一つして夫婦の寝室に入つていった。

父の言葉はいやみや軽蔑の意味を含んでるわけではない。

一般常識をなぞっただけだ。いわゆる正論ってやつだ。

管理職はほとんど女性が仕切っている現代では、男は勉強で女に対
抗するより、健康で逞しい体を養う事の方が女性にももてて世渡りに
有利なのだ。

テレビや週刊誌で女性上位の時代と殊更もてはやされた時代もすで
に一昔前。今ではそれは常識になってしまっている。

部屋で沙友里は机に向かつていた。薄暗い部屋の明かりと対照的に
マホガニー製の高級な勉強机の上のライトは昼間のように煌煌と机上
を照らしている。

数学の勉強をしていたらしい。参考書と、ノートに並んだ細かい数
式が机の上に広げられていた。

僕にはちんぷんかんぷんな数式だ。

男の教育と女の教育は分けられていて、互いに別々の教室で授業を
受けさせられる。中学三年の僕の授業よりも、一年の妹の方が数段高
度なものを習ってるようだ。

「結構我慢したわね。本当に自分で処理しなかったでしょうね」

僕が部屋に入ってきた意図を沙友里はすぐに理解してそう言った。

「もちろん自分ではしてないよ。したかったけど我慢していたんだ」

「別に我慢する事ないのに。言えばすぐにしてあげるから、今度から我慢しないでいいのよ。それとも毎晩決まった時間にする事にしようか」

いや、いいよと首を振る僕のジャージを沙友里はするりとおろした。

「そのまま両手を頭の後ろに組んで立ってなさい」

立ったままするつもりだろうか。

言われたとおりにする僕を確認すると、沙友里は僕のブリーフを一気に引き摺り下ろした。びんびんに勃起した僕の物は、ブリーフのゴムでいったん下に向けられ、ばね仕掛けのおもちやのように跳ね上がった。

「元気良いね。まださわりもしないのにキンキンなんだから。でもお兄ちゃん包茎気味だね、勃起してもきちんと向けないんだから」

沙友里は右手でいねいに僕の棒の皮をむきおろす。

僕はそれだけでいきそうだった。しかし今いってしまえば沙友里の顔にまともに浴びせてしまふ。それはまずいだらう。

「今日は少し練習させてもらうわ」

沙友里は上目遣いに僕を見上げて目を細めた。

何の練習かはすぐにわからされた。

沙友里の口が僕の亀頭に近づいて、開いた口はすぐにそれをくわえ込んでしまったから。

沙友里の口の中で、僕の一番敏感な先端が舐め上げられ、吸われる。

駄目だ。すぐにもいきそうなのに、そんな気持ちいい事されたら爆発する。

頭のうしろに組んだ腕を下ろして、沙友里を離そうとするのも間に合わなかった。

ねっとりとおったかい沙友里の舌の上に僕は3日間溜め込んだ欲望の液体を勢いよく発射した。

「まあしょうがないわね。我慢の限界だったんだから。でも聞いたとおり変な味。飲み込もうとすると喉に引っかかる感じだし……」

うつくといったんむせるような声を出した沙友里は半分くらい飲み込んだらうか。ティッシュで沙友里は口をふいている。

快感で腰が抜けたように、僕はその場にへたり込んだ。

「今度はあたしも気持ちよくしてもらおうかな」

沙友里はスカートをたくし上げると、椅子の上で腰を前にずらす。しゃがみこんだ僕の目の前に真っ白いパンツが現れた。

両足を開いた沙友里のそこは、薄い生地が濡れて少しだけ透けていた。

「おにちゃん、顔を寄せて。匂いを嗅ぎなさい」

毅然とした物言いは、少女から大人の女になるには必須の科目だ。

沙友里はすでにそれを優秀な成績で合格した大人の女のようにだった。

僕は命令されるままに妹の股間に顔を近づけた。

ふんと女の匂いがした。

沙友里の手が僕の後頭部を押さえた。僕の顔が妹の股間に密着する。

鼻が押し付けられ湿地帯にぬめりこむような感じだった。唇には湿った生地があたる。匂いがきつくなった。

「あたしの匂いをよくかいで。それから舌で舐めて」

沙友里の太腿が軽く持ち上がり、僕の首をはさんで締め付けてき

た。

僕も夢中で舌を出し、濡れた生地越しに妹の股間を舐め始める。

頭の中に熱いお湯をたっぷり入れられたようだった。熱くてくらくらして何も考えられなくなった。

すぐにパンティの股間は僕の唾と妹の別の液でべとべとになった。

邪魔な布をどけて、僕はじかに舐めたかったが、妹は一向にそうさせてくれない。

さっき射精したばかりの僕の物も、すでに痛いほど硬直状態だった。

僕はじれつたくなって、股間の布を手で横に引っ張った。沙友里のやわらかい陰毛が数本はみ出してきて、赤い濡れた縦長の割れ目が微かに見えた。

舌を襲に絡めると、沙友里は、うくうくと小さくうめいた。

息使いが荒くなってる。いきそつなのかもしれない。

沙友里の腰がずつと僕の方に落ちてきた。

沙友里の股間に押されて、僕も後ろに倒れこむ。

いったん腰を離すと、スカートをたくし上げて僕の唾液で濡れた下着を、沙友里は脱ぎ捨てた。そしてそのまま、床に寝転んだ僕の顔に跨った。

あざ一つない、赤みを帯びた大き目の沙友里のお尻が、僕の顔の上ですうつと降りてきた。降りてくるうちに膝が曲がって、あそこがクンツと伸びて開き加減になってくる。

僕の顔を見下ろしながら、位置を定めるようにして沙友里はお尻を密着させてきた。ちょうど割れ目が僕の口に来るように座り、沙友里が体重をかけてくる。

うつつらと毛の生えた恥骨にあたって、僕の鼻はつぶれそうになっ
てしまふ。

「痛い。少し下にいってくれ」

僕その声も沙友里のあそこに吸い取られて口から出ることができない。とろりと熱い液体が僕の開いた口の中に流れ込んできた。

夢中でその液体を飲み込む。次から次にとろりとろりと泉の水は湧き出て、僕の胃の中に納まる。

ふんふんとうめきながら、沙友里は僕の口に股間を擦りつけてくる。

沙友里がつかまつてる椅子のきしむ音が、静かな部屋に規則正しく時を刻む。

舌を伸ばして襲を掻き分ける。クリトリスと思しき肉いぼを唇でつまみ、思い切り吸い付く。軽いかむと、ピクンと腰を震わせて、沙友里は大きく息を吐き出した。

その時、いきなり部屋のドアが開いた。

顔の上に座り込まれている僕は目が見えないから、誰かが入ってきたのかわからないが、慌てて沙友里をどけようとした。

でも、沙友里のお尻が重くて僕は身動きが取れなかった。

「あら、沙友里ちゃん。お兄ちゃんに舐めてもらってたの。ごめんね邪魔して」

声は母の声だった。しかし驚いた風も無く平然としたものだった。

兄妹が部屋でみだらな行為にふけていたというのに、注意するどころか、邪魔したねとはどういうことだ？

「そのままでもいいわ。お兄ちゃんはちゃんと沙友里のを舐めているのよ」

誰かが僕の硬直した棒を握った。

握り方がさつきと違う。というよりも沙友里は僕の股間には背を向ける形で跨っているのだから、沙友里に握れるはずは無い。

僕の物は今、母親にじかに握られているのだ。

僕は何がなんだかわからなくなった。今まで暮らしてきた家庭の常識から考えて、ありえない架空の出来事のように思えた。

「ママ、何か御用？」

沙友里も平然として言った。

僕の顔の上でお尻をずらしながら、感触を楽しみながら、母と平気で話をしている。

「別に。もういいのよ。沙友里ちゃんがまだお兄ちゃんを教育してないんじゃないかと思って来て見ただけだから。ちゃんとお兄ちゃんを管理してるとわかって安心したわ。女の子はそつでなくっちゃんね」
二人は和気藹々といった感じで、そのまま他愛の無い会話に移った。

そうしながらも、僕の物は母の手で擦り上げられ、快感を嫌でも高められる。

「この年頃の男の子は、こつやって何回でも行かせてやるのがいいのよ。三回くらいで嫌がるものだけど、強引に擦って毎日五回は搾り取ってやるの。若い男の子の無自覚な性欲は暴力につながるし、社会的には百害あって一利無しなんだから」

快感の中で、難しい話は理解できない。

僕は二人の話の意味もわからずに、自動的に背中が反り返って一気に発射してしまった。

「お兄ちゃんったら、一回目なのにずいぶん飛ばしたわね」

やっと目の前が明るくなった。

立ち上がってうつむく沙友里の顔と母の顔が、けだるい部屋の中で僕を見下ろしていた。

兄妹の風景 観覧車

妹と二人で遊園地に来た。

バスに2時間揺られ、ついた所は華やかな色彩に彩られた人工の楽園だ。バスから降りると沙友里は、二人分の荷物を抱えた僕をせかすようにして入場口に向かう。

「お兄ちゃん早く早く。もうとつくに待ち合わせ時間過ぎてるんだから」

非難のこもった口調だが、実際に遅れたのは沙友里のせいだった。

朝からシャンプーするためにシャワーを浴びたりするくせに、早く起きる事もしない妹だ。7時半のバスに間に合っはずも無いのだ。結局僕は30分遅れのバスに乗って時間よりその分遅れて、東入場口にたどり着いたのだ。

しかし、どうしてこんなに荷物が多いんだろう。別に泊りがけの旅行というわけじゃないのに……。夕方には家に帰るといふのに、このかさばるデイパックはいったい何事なのだろうか。

東入場口には、ふくれつつらをした妹の友達が三人来ていた。

そして彼女らのそれぞれの弟や兄貴が三人、うつむきながら立っている。

初夏の好天に恵まれた一日は、遊園地の壁に書かれた派手なイラストとともに今始まるうとしていた。女の子達はみんな浮かれて楽しそうだった。

ミニスカートから惜しげも無く太い太腿をさらし、ルーズソックスが包茎のベニスの皮のようにその足先を包んでいて、頭にはすでに買ってあったねずみのキャラクターの耳をバンドで固定している。

絶えず笑い転げる彼女らの顔は老人のようにしわを刻んでいる。その顔が笑いのしわを深く刻むほど、反比例して男達は重苦しい沈黙に沈んでいくようだった。

「この観覧車一周三十分もかかるんだって。たっぷり楽しめるね」
観覧車の籠の中で沙友里がスカートをたくし上げながら言った。

すぐに黄色いパンツが見えてきた。すでに中心が粘液で濡れてるそのパンツを沙友里は座ったまま器用に腰を浮かせて脱ぎ捨てた。

「ほら。最初は口できれいにしなさい」

腰を前にずらせて、両足を大きく開くと、沙友里は僕に命令した。

狭い籠の中では、体勢的にかなり厳しい。僕は座席の間に身を沈ませると、黒々とした陰毛がすでに生えそろっている小百合の生白い股間に顔を近づけた。

ツンと刺激的な匂いが僕の鼻腔に侵入してくる。妹に卑猥な事を強制される屈辱感も、僕の中ですでに快感に変わろうとしているくらいだから、僕の股間の物もすっかり元気になってジーンズの中でキチキチとその居場所を主張している。

ほとんど座席の先端から股間がずり落ちるくらいに沙友里は腰を突き出している。

僕はその縦に長く割れた沙友里の褰に優しくキスをし、上端にある木の芽のような突起に吸い付いた。

それはいつもはほとんど気付かないくらいの大きさなのに、今はピーンツツくらいに膨張して、艶のある赤紫色に輝く宝石のように見えた。

うん、あ……。

沙友里の甘い声が籠の中に響いてきた。誰にも邪魔されない二人だけの密室だ。

籠は地上から十数メートルの高さを、さらにゆっくりと上りつつある。

目を上げると、沙友里の肩越しに一つ前の籠が底を見せていた。僕は両手を沙友里の膝の裏に回して、量感のある彼女の両足を高く持ち上げる。

沙友里の放射状にしわのよった薄茶色のお尻の穴が見えてきた。

そこに鼻をつけて匂いを嗅ぐ。そして今朝方の分だろう、白いペーパーのからまりを舌でこそぎ落としてやった。いつものように苦い味が口の中に広がった。

「そこ、いいよ。だいぶうまくなったねお、兄ちゃん」

妹に誉められて、僕は少しだけ気分がよくなる。この後長く辛い時間が待ってるが、今だけは確かに押さえきれないほどの興奮に充ちた快楽の時間なのだった。

アヌス攻撃をいったん止めて、再び割れ目に舌をはわせる。

薄い二枚の褰を広げて、その中のふつくくらしいぼに囲まれた赤い穴に舌を入れた。とろとろぬめぬめした液体が絶え間なく流れてくるその場所は男にとっては最高に神秘的な場所だ。

限りなく卑猥で、限りなく神聖な場所。

こうしていると僕はこのまま頭を押し込んで、中に入り込んでしまいたい気持ちに襲われる。胎内回歸願望というのだろうか。

僕らの乗った籠がちょうどその軌道の、最も高い場所に来る頃、沙友里は言った。

「いいわ。どいて。そろそろ下りになるから、始めましょ」

沙友里はいったん僕の向かいの椅子にきちんと腰掛けると、バッグの中から小物

入れを取り出した。そして、その中から赤いパッケージのゴム製品を
ていねいに摘
み上げ、切り口を破って中身を出した。

僕は言われる前にジーンズを下げて、下着も膝までずり下ろした。
血管の浮いた僕のが、前かがみになった僕のへそに密着してい
た。

まるでそのへそが女の穴でもあるかのように、入りたくてたまらな
いという風に
している。へその周りは僕のもの先端からにじみ出たぬるぬるの液
で濡れてさえ
いた。

沙友里が手馴れた手付きで僕の硬直した棍棒を握り、皮を剥きなが
らコンドーム
をかぶせた。

なれない人間がすると、端が内側に巻き込んでうまく装着できない
コンドームだ

が、どこで覚えてきたのか、沙友里は最初から手馴れたものだった。
学校の保険の時間に習うのよ、と以前聞いたが、本当の所はわから
ない。

誰か別の男とさんざん経験済みなのもかもしれない。

赤いコンドームを装着された僕のはつややかに光って見るから
に炎の剣といった感じだった。この炎の剣でドラゴンを成敗してやる
のだ。

ドラゴンの赤い口にねじ込んで、ひねり、突き刺し、命を奪うの
だ。

僕の夢が続いている中、沙友里は僕の椅子に足をかけ、腰を近づ
けてきた。

沙友里はスカートも脱いで、まくりあげたティーシャツ一枚といっ

た格好だった。

中学1年にしては豊富な胸が、乳首を硬くして僕の前の前に揺れて
いた。

握られた物が、ぬるぬるした溝にはさまれる感じがして、沙友里の
腰が僕の太腿に落ちてきた。一気に根元まできつく締上げられる。

「乳首吸っていいよ」

命令口調じゃなくなつたのは、沙友里がとても感じてる証拠だ。
感じだしてるから、それ以上興奮する必要が無いのだ。

やはり兄貴に命令するのは沙友里にとっても、興奮ものなのだ。

ゆっくりまわる籠の中で、僕たちはつながり粘液の音を周囲に垂れ
流しながら腰をうごめかした。うんうん、と気持ちよさげに沙友里が
つぶやく。

僕の荒い息と沙友里のかわいい声が、ゆっくり動く外の景色とともに
に混合され、眠気にも似た澱みの中に二人を落としこんでいく。

沙友里と結合しながら斜め上を見ると、僕たちの一つあとの籠の中
で、同じように繰り返らている結合の儀式が垣間見える。

その籠では、男、確か兄貴だといってたかな、が立って、その妹を
首につかまらせるようにして結合していた。

男が腰を揺らせるたびに、その妹の軽い身体がしぶきを上げて打ち
付けられていた。彼女は大きく口を開いてうめいてるように見えた
が、こちらには何も聞こえてこない。

普通と違う場所での卑猥な行為は、僕を速やかに興奮させ、早くも
絶頂に導きつつあった。

「沙友里、ちょっと待って。もういきそうだよ」

僕の声を耳元で聞いた沙友里は、いったん腰を動かすのを止めて、
僕のおでこに

キスするとぬるりとした感触を残しながら立ち上がった。

「今度はお兄ちゃんがあたしを犯して」

沙友里は言いながら座席に手をついて、うす桃色のお尻を座ってる僕の顔の前に突き出した。桃色のゆで卵のような滑らかな感触の沙友里のお尻を、僕は丹念に撫でまわす。もんだりつかんだり、軽くつねると、ん……あん、と甘い声を沙友里があげる。

キーンとくびれたウエストを両手でがっちりホールドして、僕はいきり立ったファイヤーブレードをドラゴンの口に突き刺した。

熱い炎の剣よりも、ドラゴンの口にはさらに燃えるように熱い。

両方からクンッと啞え込まれ、亀頭の力りを髪髪がゆるゆる刺激してくる。

懸命にこらえながら腰を使うと、沙友里の甘い声がさらに大きくなり、彼女のお尻のうごめきも激しく、締め付けもきつさを増してくる。

あん、いいよ。もっとズンってはいって来て。うわ言のように沙友里は言って、尻をこちらに突き出してくる。ぬるぬるの秘所は滑らかに僕の剣を包み込み、啞えこんで離さない。

腰を打ち付けるように動く僕たちの横で、風景はゆっくり地上に近づいている。

あと五分もすれば、最下段のゲートに到着して係員に扉を開かれるだろう。それまでに終わって身だしなみを整えないといけないというのに、そんな事を考えたらなんだかいきそうなのにいけなくなってしまう。

やばい、そろそろ地上にいる人間からも籠の中がうかがえる高さに降りてきた。

まだ上体だけしか見られていないと思うが、僕がなにやら桃色のバスケツトボールを腰に当てるようにして動いている所を、こっちを見た人には気付かれてるかもしれない。

うん、ああーいいよ。今日はお兄ちゃん長持ちするね。最高。もっと

と動いて！

沙友里の声で僕もやっと頂点が見えてきた。

ゲートが近づいてくる。係員の薄くなった頭頂部が見えてきた。

う、くう！僕は言葉にならない快感の声を漏らしながら、沙友里の中で爆発した。

ズンズンと、三回打ち付けて、僕は力尽きる。

係員が扉を開けたとき、僕は何とかズボンを引きあげていたけど、沙友里はスカートをはいただけで、ノーパンだった。

籠から降りる時に、係員がニヤついていたのは多分沙友里のノーパンのお尻を覗けたからだろう。少しかがんだだけでパンツが見えそうだなミニスカートだから……。

「最高だったね。場所が良かったのかな。お兄ちゃん長持ちしちゃって、降りる時パンツはく暇もなかったんだよ」

芝生の上で友人達に上気した笑顔を見せながら沙友里が言った。

沙友里の友人達、小野寺和子、北川信子、遠藤美紀も、同じように火照った顔で笑い合っている。しかしその兄達は、僕も含めて彼女らの傍でやや疲れた顔で、お互いにチラチラと視線を交わすだけだった。

「あたしのお兄ちゃんはさっき二回も出したよ。早漏気味は相変わらずってとこかな」

遠藤美紀はぼつちやりした顔に、不安げな表情を見せて、彼女の兄貴らしい長身の男を指差した。

美紀の兄貴らしい男は、すぐに顔をうつむけて、ごめんと一言言った。

彼は僕より年上らしかった。あごひげも大分濃くなりかけている。

少なくとも高校2年以上だろう。

彼女らは自分の兄貴達を紹介するという考えは全くもっていないのだからか。

朝、みんなで会った時から自分達の話題に没頭するだけで、僕らの事は無視されたままだったのだ。

だからと言って男同士で何か話したりする気も起こらない。

妹の命令で連れてこられた男達は、みんな妹に飼われているペットのような物なのだ。

する事もなかった。僕は沙友里の友人達をさりげなく観察してみた。

遠藤美紀はさつきも言ったとおりぼっちゃり型で、小太り体系。顔は悪くないしむしろセクシーだとされてもてるかもしれない。胸も沙友里より大きめだし、太腿を見る限りお尻も大きくてきめの細かい肌はさわり心地も良さそうだった。

小野寺和子は、きつい表情が似合う女王様タイプかな。ルーズソックスよりも編みタイツの方がぐつと大人っぽい雰囲気が出て似合うだろう。

切れ長でやや釣り目気味の両眼は、男に命令する事を最も得意とする雰囲気発散している。

北川信子は、反対にこの中では最もおっとりした感じだった。

小野寺和子とは反対で、男を顎でこき使うという感じからは程遠い。

顔つきもどちらかといえば薄幸の美少女といった感じで、いじめるよりもいじめられる方が似合いそうだった。

その北川信子が言った。

「じゃあ、今度はパートナー替えて行きましょうよ。どうする？くじ引きで決める？」

見た感じと違って結構エッチが好きなんだろうか。

ボーリングの次のゲームに移行する程度の表情で、第二ラウンドを宣言した。